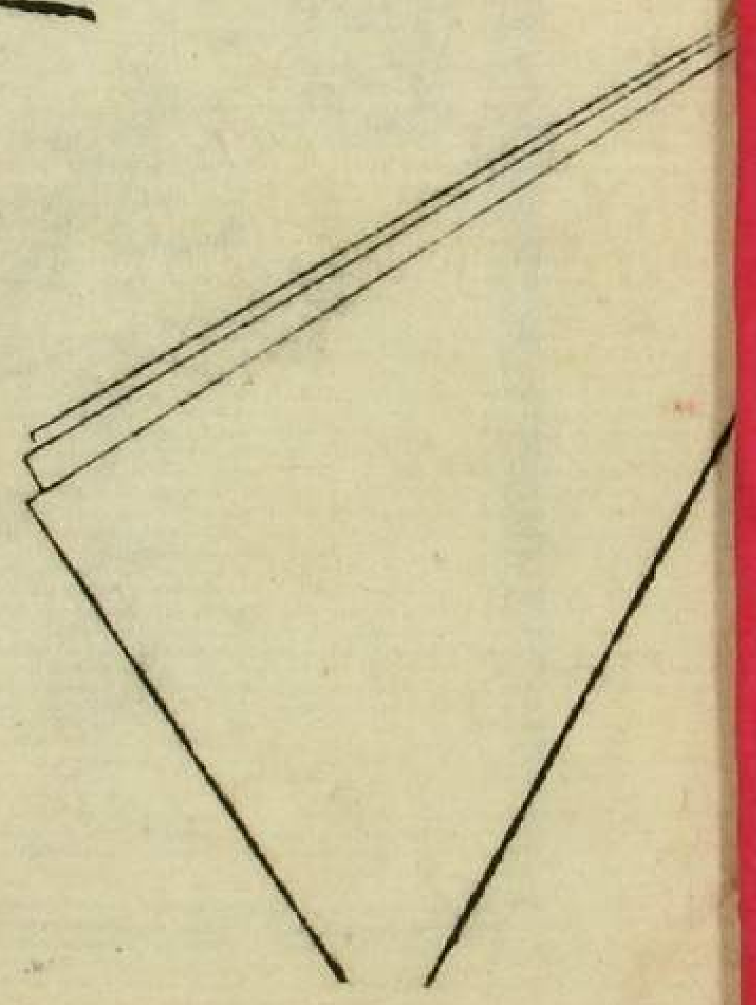
東京妓情

醉多道士戯著

上

ヲ 6
4063
1

東京妓情



門 76
號 4063
卷 1

東京妓情敍

艶陽朝與花酣。花京言辰晴夕与月昵。月蘇情於是以空添寸子愛鮮語色戀香增月數坊生嘗乎康中。安蓄替殊狠攙。

畫舫載酥。繡簾以眠然
而銷磨酒情花月。論才觀韻
事。不如東京芸妓花月。
才人跡往親此者何日浦
里姐所謂小ゝしき縁で
彼の人ひ一逢としのゝ

こゝらがあむさが身はきみしくと
惚こ舞でロ有此嬌語工
繫歡心已。余性ぬ冶游銷未
嘗暱纏萬動。鶴游
枘朔快味。抬東京綺羅嬌
寫不雑一冰不試花月

真個今也春事繁多。兩個花月可並賞。試之傳劣於正史之信乎。乃記風流之煙華。兼下蘇小緑珠之心窮。使以具之一榮。綴遊情之。袖以一

小冊。張模樣於坊平康四其下。貴之所以多繁。於是乎叙。明治十六年花朝之日。醉道士識於南廬軒中之留不於賣花為。

早櫻一朶肩来

東京妓情序

新橋繡車朝訪棠娘之家栁橋畫舫夕維李姐之門東台花開珊鞭走公子馬濹江月昇羽觴飛美人舟嬌苑春濃常植消魂種湘簾夜深巧護開語花我東京妓流盛何秦淮柳巷比但夫人情日移世態年變江左深川老翁泣説舊歡

城南金沓。大官頻誇新華盛衰何亦有定冷熱由来難測且波闕東覇氣漠然收跡卻是西土士人翕焉當路於是乎。人情頓變東京欲無復一江門兒感化所至施及妓流敢俠韻致之事既無解者。猥陋貪婪之風。殆作時俗可勝歎哉。

噫。東京之花濹江之月待春而粲然笑

逢烌則瓏然来春花龜月依依誇東都之色。人情風俗。何獨失江門之氣乎。唯是遊人豪華。不讓往時。或携以學謝安或忘歸擬劉郎。若夫文牀溺愛糟糠妻空下堂。陶朱破產西施再鬻歌舞。其盛其榮。將使孫繁折北里之筆。使羅隱燒比紅之稿。亦可謂盛矣。雖然名花早謝。

旾風難留。佳人常悲薄命。才子長歎落魄。無古今一也。寧知將來之變遷。有甚於昔時乎。余少年之昔。亦是青樓薄倖之徒。追憶往時。桃姊李妹。爲當秊之知己者。或流離浪越。白雲無所重逢。或湖波雀塵。返魂香何堪焚思。低唱淺酌之古感。併袖同車之舊。見二分之明月。徒

悔揚州無賴。聽七年之夜雨。獨恨錦城歌吹吁嗟。十秊無爲。長作都門漂泊之人。豈得無感於舊情事乎。余先輩醉多道士。有情之人也。見其東京妓情。都下幾處教坊。寫情抽態。實是明治妓業之活歷史也。後世訪蘇小之跡。弔真娘之墓者。其讀之與余同感否。

明治十六季花朝後三日

東都 淇上醒史撰

畊煙逸人書

凡例

一 余嘗きに風流の罪障消滅乃爲め因果能化に懺悔して花柳事情を著に幸ひ通客粋士の愛讀そる所となり爲めに非常乃圓助を儲け巨額の公債證書を購ひ得たり然るに持病再發し權妻相乗り幌掛け頰片押付けと浮れ遊びしを以て又候ろふ身代をもテケレツパアさ皆夢に歸せり退て思ふ是れ罪障乃未ざ竭きざるなりと則ち自來遨遊して飲み潰れたる

一東京妓街二十有餘ヶ所の歴史并びに風俗心事手練手管その他苟くも妓乃身上に関係ある事実も盡く之を寫し出し以て更らに懺悔せんと欲るも是れ復た厄介なる書を擔ぎ出して世間通客の氣を妙にせしむる所以なり

一余元來階子上戸なり故にその飲む決して一樓にて足れりとせず則ち柳橋に酌む酒未だ醒めざる内飛で芳町に至て飲み更らに轉がりて数寄屋町又も日本橋に至て潰る是を以て彼を愛し之を憎むの偏頗なし本編中抑揚褒貶あるも蓋し事実を綴り出だしたる者にして其愛憎に出しに非ざるも諸姐の信じて疑はざる所なり

一東京三千の妓中此書を讀で或は大に怒り隊伍を組で次郎はんの家へなだれ込むものあらん是れ豫て期する所なり然れども余一言あり夫れ次郎さんも色男なり今業平なりその襲ひ來りて一たび御顔を見ては恍焉として

先きを争そひ情夫ふせんと為めに同士打ちとなるや明けし若しそれ之を否なりとせず看よ看よ次ぎ乃真像我看よ

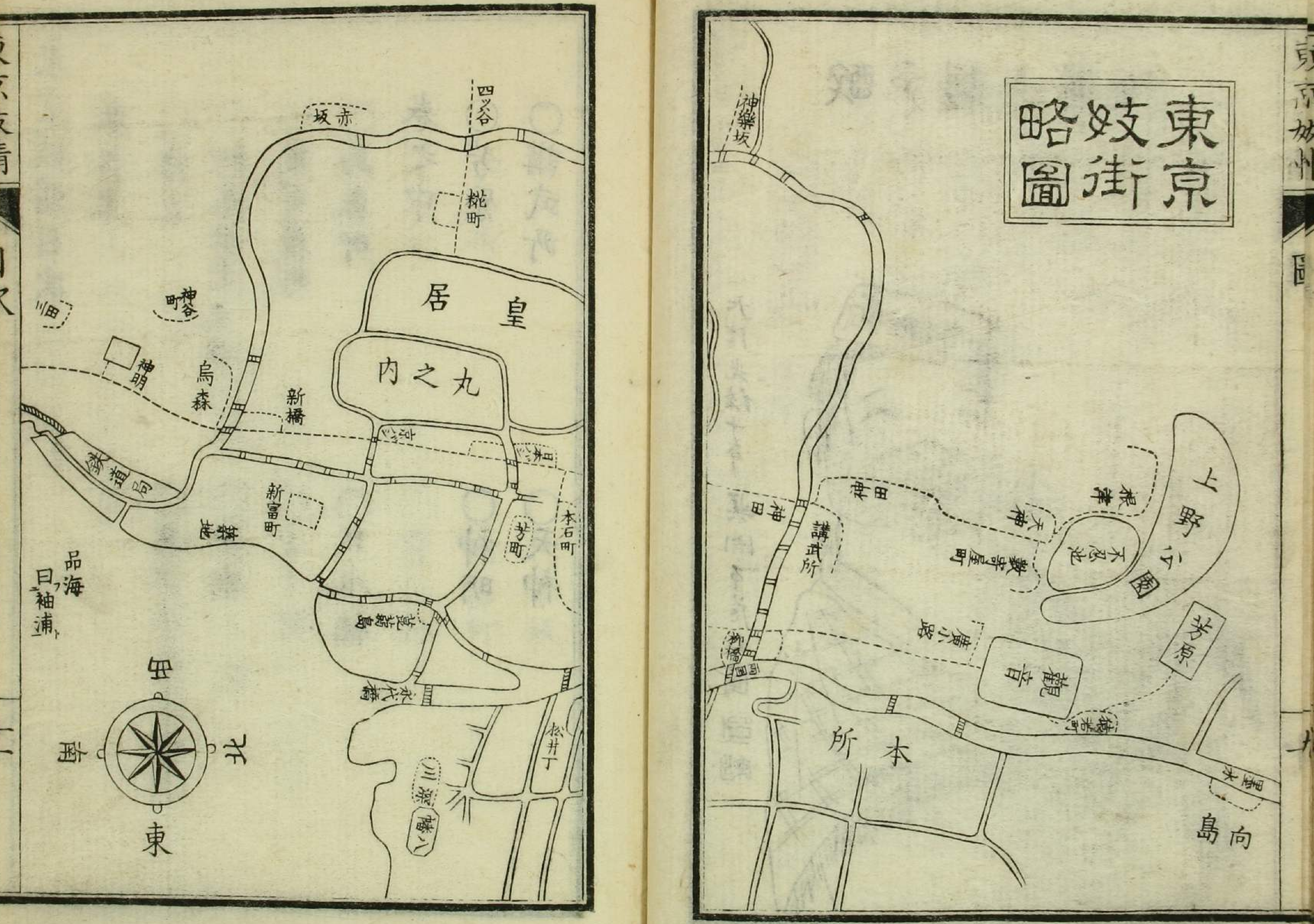
一 東京綺羅叢裡の事四十餘類ありて未ぎ盡くしなりと云ふ遑からず然らむ尚ほ之を記さん乎筆及ぶべきに非らず語寫すべきにあらぞ所謂以心傳心の秘事巨多さなりて試みに思へ花乃香ひ如何寫に觖妓の風致態度何ぞ之と異ならん世間同臭の人それ仔細を究めんと

欲せむ実地に就て解得せよ然れども浦里の主人曽て曰ふあら親がゝりなら勘當ら為主持ならむ親方の手前仕損なふを知れることさ先づ是を兼知しく而る後その手で御釈迦の顔なすべーしサ

廓の次郎さん湿水不言の花さ幻をぬくのしたるあしさ宿酔乃頭痛を堪らへ向ひ酒献立てれ遑ま筆をはしらして例の管をまく

今宵定
聘誰家妓
柳擺〻腰
月様眉体
〻倚門前歩頻
急蘇箱子已
待多時
滬上醒史孫題

酸予道士眞像
大清光緒十年 呉州市花古寫


東京妓街略圖
神楽坂
上野公園
不忍池
天神
根津
数寄屋町
神田
講武所
広小路
観音
芳原
本所
向島
墨水
両国
皇居
丸之内
四ツ谷
赤坂
糀町
神谷町
三田
神明
烏森
新橋
京橋
日本橋
本石町
芳町
新富町
築地
品海
日ノ出浦
霊岸島
永代橋
松井町
深川
八幡
西
北
南
東

東京妓情目次

卷之上

○緒言　○東京平康等級表

○柳橋歴史風俗　○新橋

○數寄屋町　○よし町

○烏森町　○日本橋

卷之中

○芳原　○神明

○講武所　○天神

○深川　○神樂坂

○本石町　○新富町

○猿若町　○廣小路

○蒟蒻島

卷之下

○妓の成立　(自前)(抱)(叩き別)

○藝妓の辛苦　○藝妓の心

○藝妓乃性質を知る事

○賣春ハ二途ある事

○情夫の見立
○妓と酒樓との関係
○妓奴の事
○妓と妓奴の関係
○纏頭乃事
○席の速かるを好む事
○歌妓のなり果
○野夫
○遊の種類（酒樓）（待合）（船宿）（妓家）
○逸話

上中下合巻通計四十四類

○魔王曰自許通人酔翁自惚先発端緒

東京妓情巻之上

花柳御門　酔多道士戯著

緒言

六朝の金陵古へ佳麗の地と稱し而して綺羅紅粉の盛なる江南に冠たり當時余をしてその間に流連せしめバ校書の風光と織出し以て有情公子乃襲となし延て後の粋客に傳ふ所あらしも風流の罪科古ニ淺く今ニ深く五濁乃身を此明治の天地に在て

○随テ金力ニ亦タ変ス

○聊消遣スル耳

之を見れども見ず之を探れども得ず嗚
呼何ぞ昔人の脂香粉膩に幸にして今人乃
薄倖なるや退て顧ふ情天色界有て以来歳
月幾千ぞや而して妓乃情も時人に随て變
じ讌臺乃歡も風俗に由て移るなし猶墨陀
春漲りて騒客銀鞍にして玉策紅塵を花下
に颺げ二州月湧けば畫舫にして蘭棹琲杯
を波上に飛ばすが如く時好を追て變移な
き能はず然れば則ち金陵の艶麗紅顔に富

○酔翁曰ク使ムル恨マ後朝ヲ者ハ世間只ダ有ル余耳

○醒史曰ク時宇有味

○魔玉曰ク

み呉宮の讌に遨ぶも固是れ六朝の佳人才
子を待て價あるものなり豈に明治乃粋史
として賞花して微吟春思秋想之と金閨に
繋ぎ以て後朝残恨ましむるに堪えんや蓋
し人を同じけれども時異なれどあり反て
思ふ今の花苑香甫乃情亦永く余が萬言を
玉門関に遺して去る暁まで同一なる歟太
上老君を俟て知らざるなり然らば則ち情
も時の情を娯しみ讌も時の讌を樂んで我

翁曰、擬老子探尽彼十洲八島否

○花柳曰、尽見敵之的

適之れ適せば則ち已んのみ何ぞ金陵乃綺羅に眷戀するを須ゐんや是に於て乎彼嚮きに北里誌平康記あり後に板橋雑記白門新柳記あり我前に繁昌記柳橋新誌あり後に十七名花譜新橋雑記あり皆な當時の風俗を點綴し歡情を寫し出し以て適の適と見し未だ嘗て舊煙花を記する者もあらぞ否之を記するも錦腸の才人に用なけれバなり而して此数部の書南都の脂香平康の艶冶

○中洲曰非酔翁不能野夫着想

○魔王曰翁脱兜吹

才子の不遇を傷み佳人の薄命を悲しむ或も飲ぬ毫あるもの或ハ情に濃かある者を寫し來り神蕩け魂消ゆと雖ども未だ着想を野夫にしその情痴を虚無にし香花の間に走り彼花を実なく此実ハ味なく其培養も斯の如くその觴ぐも斯の如しと入て湘簾繍幕の中を覗ひ之を世間に唱道するハ書もあらざるあり余や振古の不粋者流章臺に登る毎に妖婦艶姫より臂鉄砲を賜ひ

本音ヲ

○所謂犬糞討儺者

以て跳つけらる夫れ臂銃を賜はる者ハ無情漢あり自から無情漢とし妖婦艶姫の跳つけらるゝ所となるを知らバ則ち摘花偷香の念ひなし故に又是を親しみ彼に踈の別なく乃ち香園を蹂躪し名花を毀傷するも敢て痛ましとせぞ是れ此著ある所以なり

○東京平康等級表

東京平康等級表

一等	柳橋	新橋				
二等	数寄屋町	よし町				
三等	烏森	日本橋	芳原	神明	講武所	天神
四等	深川	本石町	神楽坂			
五等	新富町	猿若町	向島	廣小路	糀町	松井町
等	蒟蒻島	西久保	三田	赤坂	根津	

右表ハ冷熱及び妓数の衆寡を以て定め

○醒史曰
説起艶婉

たるにいらぞ聲價を以て次第せしあり
○柳橋 在日本橋區両國橋畔
○元柳町○新柳町○吉川町○米沢町○
橋北平右エ門町に住む歌妓を総称し
て柳橋藝者といふ
○歴史
柳橋ハ旧蘇小門に待つの地さいらざ往時
六七十年前岡場所○當時深川音羽等の遊廓と呼んで岡場所と云
ふ岡を外なりと許されし頃深川を都門第一の煙

○一切御
氣が被甘

花たりしが越前守水野氏が幕府の閣老た
るの日其淫靡乃風自然と市井に移らんこ
とを歎き之を廃したるに是處に依て活路
を求めたりし妓輩も饑かゝ糊口の術を失
なひ如何とも詮方なきに當りて柳橋ハ曽
て深川通ひの画舫發する所なれば游客自
然と集ふならんとの暗算を起し一人移り
二人來り技を賣りしに果して善くその目
的に投じ随て酒樓茶肆廛を張り門帛を翻

○花柳曰令慾公寒心

へし一場の熱地に変じ歳月の久しき終さ純然たる綺羅淵叢ともなれり○地ハ墨水乃下流に方り神田川の咽喉を占め目下に二州の長橋を臨めで盛夏乃納涼晩冬の賞雪游客呼で海内無双と称せしも物變り星移り一新の後に及で関西の子弟情を解せぞ徒らに坊間の無香花を愛し且つ攀折の求めに急かるより柳橋妓と意思相合ハで為めさ本地ハ冷を來たし之を十五六年前

○一刀両断

○仙史曰一語重千金

に比それで先づ桑揄の風色なり

○風俗

東京の風月場実さ数十を以て算ふ而して之に甲たるものハ縦ひ桑揄の日と雖でも柳橋ハ措て将さ何れの處にか求めん抑も本地の風俗そ他の綺羅叢と趣を異にし江戸ハ児を待て始めて價あるものなり故さその粉飾淡白にして脂濃ならで意氣俠ゆし

○魔王曰不保無過賞

○所以柳橋妓

て風致に富む柳北翁の所謂神田上水を飲
む江戸ッ児ハ氣象にして深川の餘風を存す
る者なり然もバ曲や雛妓のときより客の
側に侍り泰然として噪しからず又嬌て意
を迎ふが如き習ひなく飽くまで老成の趣
きを具せり而して一幟と樹るに至りては
争ふこと牛後を避け技を競ひ才を衒ひ寸歩
も譲らず頗る負けじ魂に富む是を以て乎
我意に合もされば假令数十金を投ずるも

○附用事言妓慣白辨

○醒史曰天府宣告

之が為め性を折て錦帯を解かず又其意に
投ぞれど用事を附て遊ぶを厭はず情に俠
を立通して後ち巳むの氣象と云ふべし然
れども俠に偏するの弊か。その情夫を択む
乃眼に乏しく往々鳶の者或は角力又は舩
子等を愛し世に謂ふ通人粋客に戀せず蓋
し鳶乃者輩も淡白にして宵越しの銭を持
たず総じて濃重ならざるを最もその意氣
に投ずる故ならん此情態を知らずして関

○驄公黙然無一語

○醉翁曰柳橋近況在眼中

西の子弟等祇園町或ハ大坂島の内ニ冶遊する趣を以て此ニ臨むが故に常に厭てる所となるなり嗚呼東京三千の歌妓中関東の氣象を墮さず昔時江戸の趣きを存する者唯り柳橋あるのみ之を東京一の藝妓と云もむべし〳〵何ぞや中井櫻州柳橋を賦する詩ありて曰ふ

關東覇氣漠然終。唯有絃歌存古風回首二州橋兩岸。人在青樓春色中。

○慷慨

○新橋在芝區与京橋區境

○金春新道○日吉町○南鍋町に住む歌妓を總称して新橋藝者といふ

新橋藝者ハ舊金春藝者と称せり幕府の御能師金春太夫の賜地に住せしを以てなり當時ハ微々として振はず柳橋に劣ること数等遥かに日本橋藝者の下に在りしが一新以後田舎漢江戸ッ兒に代りて要路に中りその政務は暇争ひて関東の花を折らんさ

○柳妓是左幕党
○新妓自勤王党

し柳橋に遨遊せしが哩共もベランメイと意氣相合もぞ殊に柳橋妓ハその左右する所となるを屑とせず多く臂銃乃八を喰しせたるより鯰公等失望乃餘り恰も連合なたるが如くその接近（一新の際九の内並びに愛宕下築地辺ハ多く官員の住居となれり故にいふ）る金春に向ひ蘇小を訪ひ始め同地の妓も千歳の浮曇華に遇ひ意外の繁華を招き勢ひ日に汪盛の形状と際し恰も好し明治五年政府より煉瓦石室築

○是揚
○酔翁曰此是新橋雑記
○魔王曰理容事詳

造乃舉に遭遇し蔽舎寒屋一朝にしして金碧の章臺と變じ土地の聲價頓に加はり恩波延て歌妓の地位に至り遂に今日の盛を占しめ柳新二橋と并稱せられ稍凌んとする勢ひあり隆吉勝田氏詩あり曰く

天向此樓別貯春　滿筵香逆綺羅塵　誰知倚翠猥紅客　悉是佩金施紫人

○風俗

粉黛施こして濃く柳眉畫て厚く粧飾華麗

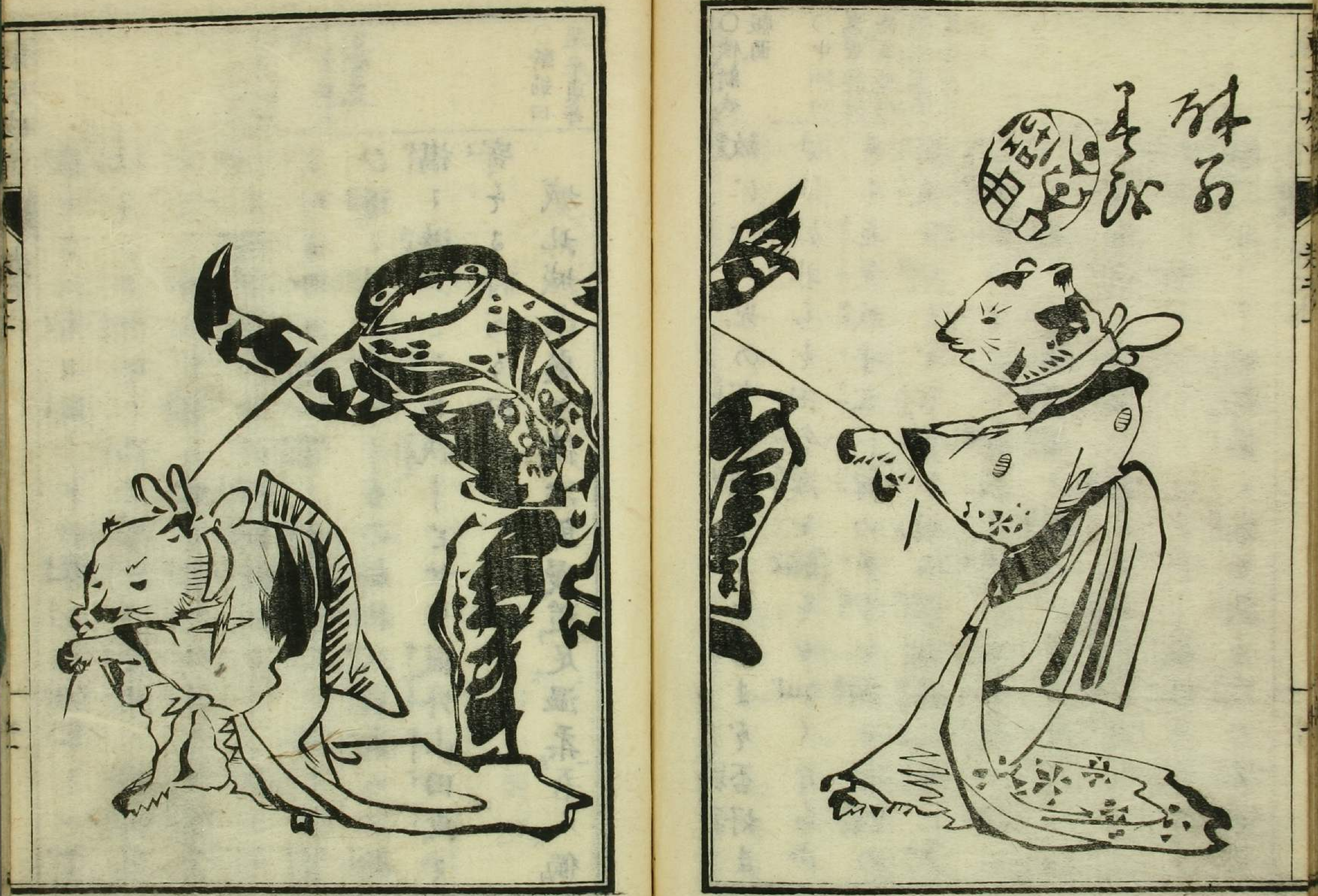
○柳揚自在

と重ぬるも新橋乃風俗なり元と此地田舎漢によりて熱鬧場になりしなれど左もありなん殊に雅淡瀟洒の趣きに乏しく又意氣地の何物たるを知らず新橋雑記に所謂凡百悉皆柳橋に如かずして蘇小を問ふの車柳橋ハ向はずして新橋に來るの多きも何ぞや笑誂媚を献ずるに巧みに色授け眉與ふるに善きを以てなりと謂ふべし穿ち得たる者ありと風俗已に斯の如くなるか

○使新妓報面

○中洲曰罵詈讒謗極矣思酔翁有意趣意恨然乎

故に江戸ツ児の客に接するを好まず否好まざるに非らず田舎漢を騙すが如くならざれば也是故乎客ハ髯の多少を論せず帽の高低を問はず官員を好み学者商人等ハ多少銭あるも之を輕蔑し妾ハ某参議に陪したり我も馬華長者に寵ありとの卑劣の心も其語氣に鼻頭に顕はれ通人粋客をして嘔吐に堪へざらしむされど雛妓乃内より敏捷にして嬌聲能く客を釣り殆ど蒼姫を



○花柳曰娼賣敏捷者
○青紫人言官員
○酔翁曰是平康等

靨なるに至る然しその舉止乃陋なる八子供らしき所なく殆ど芳原の雛妓と伯仲に況して蒼妓も客を視る路人の如く親舊をそゞくて情を異にせば唯金銭によりて異のそるなるのみ是れ常の青紫の人を騙その習ひ遂の性と為りしもの歟柳北翁為めに新橋の遊ぶを心に快しとせぬ風外山田氏の寄せる詩あり曰ふ

城北城南處々樓。冶郎漫道足温柔。吾人獨

級表

愛柳橋柳越様風姿宜雅流

○数寄屋町在下谷區上野公園下

○同朋町○数寄屋町に住む歌妓を総称して数寄屋町藝者といふ

○歴史

数寄屋町も何に由来して妓巣となりしやを詳かにせざれど想ふに當時湯島天神に旗亭ありて妓を禁じたる故之を目的として一に上野の觀花不忍池の賞雪に飲む者をあて。

○関鎖有法

○魔王曰
酔翁有負眼

にせし者歟一新以前も柳橋の次位に立ち他の紅裙隊に長たりしが柳橋とその盛衰を同ふし客を天神及び新橋に奪はれ今も暮春の花に髣髴たれども残香猶ほ愛る才子あるが為めに敢て冷を告げざる趣きなり

○風俗

本地の藝者ハその風俗柳橋の瀟洒半を取り之に新橋の華麗を加へたる者なり蓋し

○中洲曰
難保證矣

その瀟洒なるも日夕赴く所の酒樓公園の山水に接し不忍の水に臨み春に宜しく夏に宜しく秋冬亦憐むべき状を呈する有が故に所謂山水靈なる所人亦秀なるもの乎その装の花麗なると輕躁薄行なるハ此地に遊ぶ人定まらず學者遊び官員遊び書生遊び商人遊び職人に華族に日々客を異にし俗にいふ人馴れるをもつて然るなり然れども江戸藝者の藝者たる見識を存しく俠の

○醒史曰酔翁非説其情痴乎否乎

○然々

風あるも遥かに新橋の上に在りとは是と
いくさ西南の役熊本之籠城し負傷ありから
も病兵を看護したる種田少将の小星阿勝
出で意氣地乃爲めに凡しられ小峯頭たる
是等皆未ぎ新橋三千の紅粉中に聞かざる
所なり然れども本地の藝妓も城北之偏棲
し山水の風致之心逸しく乎進取の氣之乏
ぼしく且敏捷ならざと謂もど侠かして頑に
失するそのあらん乎

忍岡對不忍池水。水有蓮山有櫻。佳人併
得兩般美。櫻花麗與白蓮清。

○よし町 在日本橋東

○元大坂町○住吉町○葭町○濱町三丁
目に住む歌妓を總称してよし町藝者と
いふ

○歴史

芳町を舊歌妓の本色たる地にかちぞ往昔
堺町並びに葺屋町に劇場ありし頃芳町及

○所以尻之輕

び之に隣る甚左衛門町も孌童の淵叢なりし
て酒樓茶肆も多く之が雲雨場なりき當時
妓も絶ずに觀劇の客に侍しその歡を添
ふるに止まりしが劇場乃浅草に移轉せし
後も愈よ振はず唯彼の銀座貨幣鑄造所有りし
をもつて薪水の煙もその平康の間に立登り
獨立割據を維持したるに米商會所設立以
來朝に素寒貧なりし夕に陶朱の富を攫取
する輩所謂浮雲錢をもつて浪りに抛ちしよ

○醉翁曰妓モ亦投機ニ出没ス

り妓籍に入るもの俄かに増加し從て聲價
頻に増し今や東京第四位の綺羅叢となす
れり然れども芳町を米商會所とその盛衰
を倶にする猶ほ狽の狼を得て歩むと一般
なれば同會所乃存廢に由りてその相場も
下向きにもなり上運びもし今も弱氣の睨
み合ひといふべし　○風俗
花なり而して香なし實なり而して味なし

○仙史曰是一個照魔鏡

○出入芳妓心中来

洋画の菓物と一般なるを芳町藝者乃風俗あり誉れも求めず恥も顧みざるを亦是れ本地乃風俗なり是れ常に陪する客も米商及び相場の爲に出京する田舎漢中利に汲汲たる不文者なる故薫陶せられて然る者か試みに芳町妓に風流情事を説かば彼れ越人の秦人の肥瘠を視るが如き思持なり試みに彼に説くに袁彦道を以てせば彼れ喋々として之を辨ぜん其無香無味なる推

○抑揚有法

しく知る處き是を以て乎歌妓より出て娼流に入りたる姫吉なり梨園弟子に纏綿して数回醜名を新聞紙に傳えし奴なり深川より移住する金八の如きは夙に俠を以て名あり是れ晩花枝を辞するも僕に及びたりと雖ども老練を以て芳町に錚鏗たる者にして此妓の技量風采纔かに芳町乃面目を掩ふに足る乎然れども本地の妓は貨泉を糞土視し意氣を以て任ずれば米商に馴

るを以て淡粧爽意あるも之を新橋に比すれば稍取るべき所あり余も芳町の諸姐は望むその姿様と意氣とも米商會所の興敗に拘わらで底意強く慓えぞしく持ち堪えんことを

芳園春満簇姮娥。蠣殻坊人賭米多。羸得浮華万千利。飛成蛺蝶向嬌窩。

○烏森　在新橋以南

○烏森町○日蔭町に住む歌妓を総称し

○先欲言應來主義

て烏森藝者と云ふ曙天啞々と啼て歸途を促し黄昏鐘に和して愁ひ告ぐ烏の森何の物好きぞ後朝悪むべき聲の下に艶叢を置きて情痴の種を醸すや此地舊中川氏及び溝口氏の藩邸にして妓流の高履を聞く處にあらず一新廢藩の後その邸址を開いて往來に便なり是より新橋以北乃妓争ふて移轉し或ひはその繁華を追ふて他所より移るもの日に多き

○今変為弄肉刀所

○魔王曰 事実写出らんすん

と加へ遂に一廓の嬌窩とはなれり麻姑曰く吾自接待以來見東海三爲桑田と何ぞ思はん昔し武門竹刀を舞はせるの地今想夫憐を彈ぜるの所とならんとは

風俗

新橋藝者と纔かに一帶水を隔つのみその花月樓（橋北に在り）に飲む。妾も新橋藝者でえすよと云はゞ誰か疑はん新橋妓その伊勢源（橋南に在り）に登り妾も烏森藝者でえすさと云はし然

○中洲曰 残酷哉酔翁言

○魔王曰 酔翁記當年事

は又誰か疑はん蓋し意氣風俗その間に毫髪を容れざるなり然ども自ら異なる所以の者は鯰鰌等無情にして墻花を蹂躪するを以て遊冶とし之が爲め孔方兄を浪用するより世の所謂應來妓なるものの本地に輻湊し家々多くは妓にあらずして娼なるそのあり試みに橋南の待合茶屋に至り直ちに温柔郷を探らしむる者を命ぜば立所に應ずべし斯の如きは東京三等以上の平康に

○中洲曰 我之痴癖至是稍收矣

○鯰公無形

於て稀れに見る所なり然らバ之を三等以下に置かんや否々悉く娼流を学ぶといふに非らず此平康に掲籍するにも拘わらず綽約たる蓮花その子のきぞなり又況んや新橋と混合して善く遇し善く親しみ勢ひ烏森の二字を削りて新橋を冒さんとすればなり然るからに田舎匍出しの鯰公にも尤も適當の遊び場にして充分の愉快を取らるべしと信ず目下も款を新橋に納れて連

○中洲曰 又使障嬾

絡を通ぜり古語に云ふ性をもつて集ることを余新橋南北に於て亦曰ふ

僅與新橋隔帯流多情尤好買温柔低々笑語知何事燈影摸糊半夜樓。

○日本橋

○駿河町○品川町以上橋北○稲荷新道○元大工町○数寄屋町○佐内町以上橋南の歌妓を総称して日本橋藝者と云ふ

○歴史

○借魚河岸説起妓風

日本橋ハ舊各藩御留主居の會同と同地の魚肆を目的にして成りし聚落なり故に當時に在ては繁華五指の中に屈したれども維新以來儀かに聲價を落し妓も亦聞ゆるもの甚だ稀なり

○風俗

彼のベランメイを以て名を全國に博し任侠を以て一歩だも人に譲らざるは是日本橋魚河岸の健兒の謂なり此と往來して此

○醒史曰決字酷

○王慣手代華好面皮

と歡飲するハ日本橋藝者なりその性質の輕噪にして浮行なるハ言ふまでもなく知る所し然るからに好んで淡粧をなし曾て抹脂郭袖の習ひなく實に日本橋の冠字に背かざる風俗なり然らずも是に陶冶せられて侠氣あるかと云まで決してあきなし蓋し同所ハ富商大賈の淵叢にして之に仕ふる主慣手代華を騙し以て化粧の料となるを已れが天祿と認るか爲めに侠氣ハ常に此不

○魔王曰罵新橋末已深矣酔翁之怨念

良心に蔽はれて伸びざる者か且つ本地の妓も朝散暮集の者多く充分に日本橋の水を飲むの暇なきに據る歟概して日本橋の風俗を論ぜば商人手代職人等に頗る適する遊び場といふ可し故に若し鯰公をして新橋に遊ぶ趣を以て此地に臨ましめば恐くハイ○ケ○ス○カ○ネ○エ人だよの罵詈を被むらん是れ性相合ぜざればなり

淡掃画眉時様新。扶桑橋北満街春。万林勝五幾楼客。恐是輸籌賣錦人。

東京妓情巻之上畢